2025.3.8　GEWANDHAUS 龍ヶ崎ゲヴァントハウス【オリジナルCDコンサート】

没後50年 ドミトリ・ショスタコーヴィチを聴く 第1回

プログラム

今年はソヴィエト時代を代表する20世紀最大の作曲家のひとり、**ショスタコーヴィチ**の没後50年に当たります。あらゆる分野で傑作を残した作曲家ですが、今日は広く知られた代表的な名曲と、通常の作品とはイメージの異なる作風で書き上げた名曲を取り混ぜてお聴きいただきたいと思います。

ドミトリ・ドミトリエヴィチ・ショスタコーヴィチは、1906年9月25日、旧ソヴィエト、ペテルブルクで鉱山技師の家庭に生まれました。父は大の音楽愛好家で、母はペテルブルク音楽院出身のピアニストでした。9歳の頃から母にピアノのレッスンを受け、1925年ペトログラード音楽院に入学して作曲とピアノを学び、1925年に音楽院作曲家卒業作品として書かれた交響曲第１番ヘ短調が、1926年の国内初演を皮切りに、ブルーノ・ワルター他、大指揮者たちによって各国に紹介され、一躍世界的な注目と期待を集めるようになりました。この頃もてはやされていた急進的な現代音楽の影響を受けた作品として書かれた歌劇「ムツェンスク郡のマクベス夫人」が1936年に共産党機関紙プラウダ誌上で厳しく批判されたのを機会に社会主義リアリズムの創作法に転じ、その模範作として発表した**交響曲第5番ニ短調**は絶賛を浴びました。第２次大戦終了直後に書いた交響曲第9番変ホ長調は新古典主義的な小交響曲だったため、戦勝とスターリン勲功を称える大曲を期待していた当局から厳しく批判されましたが、これまたスターリンの植林政策を称えた、オラトリオ「森の歌」を作曲して名誉を挽回しました。このようにショスタコーヴィチはソヴィエトの体制と葛藤しながら作品を書いて行きましたが、一方で映画好きで数多くの映画音楽を書き、ジャズやポピュラー音楽を愛する一面もありました。最初に聴いていただく**「5つの小品」**は、それまで作曲した映画音楽やバレエ音楽の中から5曲を選び、2つのヴァイオリンとピアノのために編曲された作品で、かつて「ジャズ組曲第2番」と呼ばれていた**「舞台管弦楽のための組曲」**も同じように映画音楽やバレエ音楽の中から8曲を選び、オーケストラ組曲として作曲されています。どちらもショスタコーヴィチの“別の顔”を知ることが出来る作品です。本来のショスタコーヴィチに戻って、前半最後は傑作、**チェロ協奏曲第１番変ホ長調**をお聴きいただきます。多彩なショスタコーヴィチの音楽をお楽しみください。　（中川）

＊＊＊＊＊＊＊

ドミトリ・ショスタコーヴィチ（1906～1975）：
２つのヴァイオリンとピアノのための「5つの小品」

１. 前奏曲　２. ガヴォット　３. エレジー　４. ワルツ　５. ポルカ

ルノー・カプソン（ヴァイオリン）／ダニエル・ロザコヴィチ（ヴァイオリン）
カーティア・ブニアティシヴィリ（ピアノ）
（2016.4.3 プロヴァンス、グランド・シアターでのLive）

舞台管弦楽のための組曲（ジャズ組曲第２番）から

１. 行進曲　２. リリック・ワルツ　３. ワルツ第１番　４. ワルツ第２番　５. 終曲

リッカルド・シャイー指揮ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団
（2011.8.23　ベルリン郊外、ヴァルトビューネ野外音楽堂でのLive）

チェロ協奏曲第１番変ホ長調Op.107

ミッシャ・マイスキー（チェロ）
マルテイン・トゥルノフスキー指揮プラハ交響楽団
（1994.5.27　ドヴォルザークホールでのLive）

＊＊＊ 休 憩 ＊＊＊

交響曲第５番ニ短調Op.47

レナード・スラトキン指揮ウィーン交響楽団
（1988.3.24　ウィーン・コンツェルトハウス大ホールでのLive）

★ホームページアドレス　https://gewandhaus.sakura.ne.jp/wp/

曲　目　解　説

ショスタコーヴィチ：5つの小品（2つのヴァイオリンとピアノのための）

ショスタコーヴィチは15曲の交響曲をはじめ、ピアノ、ヴァイオリン、チェロ各2曲ずつの協奏曲、15曲の弦楽四重奏曲、ピアノ五重奏曲などの室内楽、ピアノ曲、歌曲、オペラに至るまで、幅広い分野で優れた作品を残しましたが、バレエ音楽や付随音楽など、軽めの音楽も多く、特に永年書き続けたのが映画音楽です。1928年、22歳の時に書いた「新バビロン」Op.18が最初で、以来1955年まで、30作品にも及ぶ映画音楽を作曲しました。**「5つの小品」**は、過去の映画音楽やバレエ音楽等の中から5曲を選び、友人であったレフ・アトフミンが、2つのヴァイオリンとピアノ用に編曲した作品です。

1. 前奏曲ー映画音楽「馬あぶ」Op.97（1955年作曲）より
2. ガヴォットー付随音楽「人間喜劇」Op.37（1934年作曲）より
3. エレジーー付随音楽「人間喜劇」Op.37（1934年作曲）より
4. ワルツー映画音楽「司祭と下男バルダの物語」Op.36（1936年作曲）より
5. ポルカーバレエ音楽「明るい小川」Op.39（1934年作曲）より

ショスタコーヴィチ：舞台管弦楽のための組曲（ジャズ組曲第２番）

ソヴィエト・ジャズ委員会に所属していたショスタコーヴィチは、ソ連でのジャズの普及、バンドの向上を目的とした「ジャズ組曲」を作曲しました。1934年に3曲からなるジャズ組曲第1番が作曲され、1938年にジャズ組曲第2番が作曲されましたが、戦争によって楽譜が紛失し、今回聴いていただく全8曲の「舞台管弦楽のための組曲」が、誤って**「ジャズ組曲第2番」**として知られるようになりました。3曲からなる本来のジャズ組曲第2番は1999年にピアノ総譜が発見され、イギリスの作曲家、ジェラルド・マクバニーによってオーケストラ用に編曲され、2000年に初演されました。ただ、これらの作品は、必ずしも本来のジャズと呼べるようなものではなく、軽音楽、ダンス音楽と言った方が正しいかも知れません。**「舞台管弦楽のための組曲」**は1950年に作曲、ここでも映画音楽やバレエ音楽からの引用がみられます。ショスタコーヴィチの“別の顔”を知るには格好の作品で、特にワルツ第2番（セカンド・ワルツ）は名曲として知られています。

1. 行進曲ー映画音楽「コルジーンキナの出来事」Op.59（1940年作曲）より
2. リリック・ワルツ　　3. ダンス第1番ー映画音楽「馬あぶ」Op.97（1955年作曲）より
4. ワルツ第1番　　5. 小さなポルカ
6. ワルツ第2番ー映画音楽「第１軍用列車」（1955年作曲）より
7. ダンス第2番ーバレエ音楽「明るい小川」Op.39（1934年作曲）より
8. フィナーレ

ショスタコーヴィチ：チェロ協奏曲第１番変ホ長調Op.107

ショスタコーヴィチはチェロ協奏曲を2曲書きました。**チェロ協奏曲第1番変ホ長調**は、ショスタコーヴィチが1952年に、チェロの巨匠ロストロポーヴィチによって初演されたプロコフィエフの「交響的協奏曲」を聴いて強い印象を受け、この名手のためにチェロ協奏曲を書いてみたいと思ったことが切っかけで、作曲は1959年の春に着手、9月上旬には完成し、その年の10月4日、レニングラード・フィルハーモニー大ホールにおいて、この曲を献呈されたムスティスラフ・ロストロポーヴィチの独奏、エフゲニー・ムラヴィンスキー指揮レニングラード・フィルハーモニー交響楽団によって初演されました。最初は通常の協奏曲と同じように、3楽章になる予定でしたが、第3楽章に長大なカデンツァを独立させたため、４楽章構成になっています。2管編成ですが、金管はホルン1本だけで、このホルンが曲全体に印象的な効果をもたらしています。20世紀チェロ協奏曲の傑作のひとつです。

第1楽章　アレグレット　　第2楽章　モデラート　　第3楽章　カデンツァ　第4楽章　アレグロ・コン・モート

ショスタコーヴィチ：交響曲第５番ニ短調Op.47

ショスタコーヴィチは1925年19歳の時に、音楽院作曲家卒業作品として書かれた交響曲第１番ヘ短調の成功によって世界の注目を集めるようになりました。そして1971年に最後の交響曲第15番を書き上げるまで生涯を通して交響曲を書き続けました。**交響曲第5番ニ短調**は1937年に着手、秋には完成し、その年の11月21日、レニングラードにてエフゲニー・ムラヴィンスキー指揮レニングラード・フィルハーモニー交響楽団によって初演されました。作曲された1937年というと、ヨーロッパの国際情勢がとみに緊迫を告げていた時期で、それがやがて1939年の第2次世界大戦の開始へと盲進していきました。各国は、軍備の強化と国内体制の整備確立に懸命で、ソヴィエトでも社会主義国家の建設のための強力な路線を設置していきました。そうしたことで、芸術関係の方面でも、音楽に関しては社会主義の基本的な方向に沿った作品を書くよう当局から要請されていました。そんな中、1933年の歌劇「ムツェンスク郡のマクベス夫人」と、1935年のバレエ「明るい小川」が、この方向に外れた作品だとして、1936年1月ソヴィエト共産党機関紙「プラウダ」はきびしく批判しました。ショスタコーヴィチはこの批判を素直に受け入れ、新しい様式の確立のための書法や要素を探し求め、交響曲第5番の作曲にもかなりの準備期間をおき、その間に相当の腹案を練っていたため、作曲に着手してからは、全体的に仕事は速く進みました。初演後この曲は、モスクワをはじめ、各都市で順次演奏され、急速に人気を得るようになりました。「逞しい精神力と闘争からの勝利」という内容を持ったこの曲は、聴く者に激しい共感を与え、今日では20世紀の傑作交響曲として盛んに演奏されています。

第1楽章　モデラート　　第2楽章　アレグレット　　第3楽章　ラルゴ　第4楽章　アレグロ・ノン・トロッポ